

平成22年6月18日

1. 出席議員

1 番	松 田	義 太	9 番	水 頭	喜 弘
2 番	松 尾	勝 利	10 番	橋 川	宏 彰
3 番	松 本	末 治	11 番	中 西	裕 司
4 番	光 武	学	12 番	谷 口	良 隆
5 番	馬 場	勉	13 番	小 池	幸 照
6 番	森 田	和 章	14 番	松 尾	征 子
7 番	徳 村	博 紀	15 番	中 村	雄一郎
8 番	福 井	正	16 番	橋 爪	敏

2. 欠席議員

な し

3. 本会議に出席した事務局職員

事 務 局 長	澤 野	政 信
局 長 補 佐	下 村	浩 信
管 理 係 長	西 村	正 久

#### 4. 地方自治法第121条により出席した者

市	長	樋	口	久	俊
総	務	北	村	和	博
市	民	岩	田	輝	寛
産	業	中	川		宏
建	設	北	御	門	敏
環	境	田	中	敏	男
部	長	藤	田	洋	一
会	計	中	村	博	之
管	理	迎		和	泉
者	兼	田	中	一	枝
兼	会	中	村	和	典
計	課	橋	村		勉
長		栗	林	雅	彦
企	画	森	田	利	明
課	長	有	森	滋	樹
長		平	石	和	弘
総	務	福	岡	俊	剛
課	長	井	手	讓	二
長		藤	家	恒	善
財	政	小	野	原	利
課	長	谷	口	秀	男
長		有	森	弘	茂
市	民	中	村	信	昭
課	長	松	浦		勉
兼	選	植	松	治	彦
管	理				
委	員				
會	事				
務	局				
長					
税	務				
課	長				
長					
福	祉				
事	務				
所	長				
長					
保	險				
健	康				
課	長				
長					
農	林				
水	産				
課	長				
長					
商	工				
觀	光				
課	長				
長					
ま	ち				
な	み				
建	設				
課	長				
長					
環	境				
下	水				
道	課				
長					
水	道				
課	長				
長					
教	育				
委	員				
長					
教	育				
長					
教	育				
次	長				
兼	教				
育	總				
務	課				
長					
生	涯				
学	習				
課	長				
兼	中				
央	公				
民	館				
長					
同	和				
對	策				
課	長				
兼	生				
涯	学				
習	課				
參	事				
農	業				
委	員				
會	事				
務	局				
長					
監	查				
委	員				

平成22年6月18日（金）議事日程

開 議（午前10時）

日程第1 一般質問（通告順による）

平成22年鹿島市議会6月定例会一般質問通告書

順番	議 員 名	質 問 要 旨
10	3 松 本 末 治	1. 一次産業の振興方策について (1) 中山間地域農業の現状と今後の方向性 (2) 有明海環境保全と漁場対策  2. 鹿島市人口減少について (1) 現在の実態と今後の方向性
11	1 松 田 義 太	1. 今後の財政運営について (1) 鹿島市における財政の現状をどのように捉えておられるのか (2) 今後、行財政改革（財政基盤強化）をどのように考えられているのか (3) 樋口市政の優先課題と財政のあり方について  2. まちづくりの原点は、人づくりから (1) 鹿島市の教育環境の『今（現状）』をどのように捉えられているのか (2) 幼・保一小一中の連携・一貫教育（中・高一貫教育）について (3) 少子化対策とし、幼稚園・保育園への市のサポートは (4) 教育現場と地域の役割、連携について  3. 将来への責任として、今、取り組むべき課題とは (1) 九州新幹線長崎ルート、JR長崎本線問題について

午前10時 開議

○議長（橋爪 敏君）

おはようございます。ただいまから本日の会議を開きます。

日程第1 一般質問

○議長（橋爪 敏君）

本日の日程は、お手元の日程表どおり一般質問を行います。

通告順により順次質問を許します。まず、3番議員松本末治君。

○3番（松本末治君）

おはようございます。3番議員松本末治です。

まずもって、樋口新市長、市長御就任おめでとうございます。

石木津川以西でしょうか、以南でしょうか、よりの市長誕生は初めてです。それもオール鹿島で誕生したことは新しい風が吹いてきたのではないのでしょうか。

オール鹿島により無投票となってしまいました。新しい市長の施政方針がわからない、今までも出る出てきていたかと思えますけれども、30年も40年も鹿島にいないで、そのとおりだと私も思います。新しく変革のときは、常についてくる課題ではないだろうか。

現在、NHK大河ドラマ「龍馬伝」土佐の脱藩下士、どこの馬の骨ともわからないというふうなことも放映されておりますけれども、無投票の益を、いいところを見つけると、勝手に見つけましたけれども、3月の予算で市長選挙は16,000千円の予算計上がされてあります。これはすべて市の財源より手出し、つまり市民の皆さんの税金からではないのでしょうか。昨日も市税収入の落ち込み等が質問されていましたが、無投票により現執行額は約3,500千円、単純に差し引きますと12,500千円、貴重な市民税金を使わなくて済んだ。職員二、三人分余分に雇用ができるんじゃないかなんて一人思っています。

しかし、昨日までの3日間の一般質問への新市長の答弁を聞かれて、知識、経験、それにはかり知れない人脈、質問者の内容よりもはるかに幅広く、奥深い質のある答弁内容、これこそ鹿島への思いかと再認識をいたしております。ケーブルテレビには映りませんが、議員はもちろん、執行部の部長、課長も新市長の答弁に身をもって聞いておられる状況であろうと思います。

きょうで4日目の一般質問、議員任期も最後の年になり初めてのことですが、いいことだと思います。これも樋口市長新効果でしょうか。執行部の方々、また熱心に議会をケーブルテレビ等で傍聴いただいている市民の皆様、あと2人です。最後までよろしく願いいたします。

私は、今回もまず最初に、第1次産業の振興方策についてお尋ねをいたします。

現在、鹿島市の基幹産業の農業、林業、漁業の3部門でどれを見ても厳しい状況であります。その中でも特に中山間地域農業の現状、本当に厳しゅうございます。そこで、今後の方向ということでお尋ねをいたします。

鹿島市における現在の財政基盤強化施策の中、第1次産業への投資比率等が問われる中、10市中どれくらいだということは、今まで過去においても答弁を聞いておりますが、平成22年当初予算を近隣市町でお尋ねをし、農林水産業部門への歳出を調べてみました。嬉野市で6.1%、太良町で11.7%、白石町で13.9%、白石町は平たん部の本当に農業がほとんどというところですから比較にはならないかと思えますけれども、そこと単純に比べ、農業、林業、嬉野は漁業はないかもしれませんが、その予算の割合であります。当市においてどれくらいになっておるか、まずお尋ねをいたします。

続きまして、有明海的环境保全と漁場対策ということでお尋ねをいたします。

樋口市長が先日、芸能人の経験もあると言われておりましたが、そのロケ地は七浦海岸沿いであつたらうと思います。七浦地先であります。そのころの約50年前の干潟と今現在の干潟、私も50年前ごろ家の前が海で、潟でありましたから、よく海で泳ぎ、顔は真っ黒になるぐらい潟で遊んでおりました。アゲマキをとり、ムツゴロウと遊んだ思いがありますけれども、ムツゴロウはやっと今復活しつつありますが、アゲマキがまだ復活できないでいます。市長が戻られ、ガタリンピックなり、七浦地先の干潟を見られ、どういう感じをされているか、お尋ねをいたしたいと思います。

続きまして、大きな2番として、鹿島市の人口減少についてお尋ねをいたします。

これは先日、徳村議員からの質問もあつておりましたが、私も5月の「広報かしま」を見てびっくりしました。毎回人口減少を気にかけて見ておりましたが、3月31日現在となつておりましたけれども、前月対比195人の減ということで、190人もというような気持ちで見ました。それで、昨年、一昨年と同じ時期の市報を見ますと同じような傾向であり、企画課で資料を請求いたしました。

そしたら、10年間の月別の人口推移ということで見ますと、ここに表をつけておりますけれども、（表を示す）抽出いたしまして平成12年、18年、21年の3カ年の月別の下が4月からずっとって3月までです。その減少傾向ですね、平成12年度の4月、3万3,957人ですが、それが2月は3万3,967人、同じように平行な形で推移したようになっておりましたが、3月ではそこでも75名ですか、減っております。18年、21年は、やはり2月から3月で100名——さっき申し上げましたように今回が195名ですね、ことし22年の3月31日で195名の減となっておりますけれども、その傾向はここ10年ほとんど変わっておりません。

そういうところから見ますと、どういうところで転出がなされているのかなというような思いもしましたけれども、まずその傾向、どういうふう当局としてとらえられているか、お尋ねをいたしたいと思います。

最初の質問をこれで終わります。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

まず、予算についてほかの市町と比較をされたことがございましたが、そもそも私の予算についての考え方を1点だけお話をしておきますと、予算編成作業においていろんな議論がございますけれども、こういう数字の議論ですね、一種のシェア論なんですけれども、この議論をする場合には、前提が2つないといけないんじゃないかと思うんですよ。それは一定のそれに与えられる歳出規模が、ある程度安定的になっていないといけない。そうしないと比率にしますときの母数が動いた場合には、つまり分子の数を幾ら議論しても余りに変化が

あり過ぎるということでございます。それから、もう1つは、シェアをするという場合には、ある程度長期的に支出が予定をされている財源といいますか、原資として予定をされているものでないと、余りにくくりが大き過ぎると難しいなという気がしております。

そこで、もしこの議論をやるんだったら、例えばある程度長期に見て比較をしないと、ある瞬間風速で比較をしますと、例えば似たような市町をおとりになりましたから当然おわかりだと思いますけれども、歳出規模が100億円から200億円程度のところでこの議論をやりますと、例えば10億円とか1億円でもいいんですけども、動きますと、シェアがぼんと動きますですよ。つまり、1億円動いた場合には1%の範囲で動く可能性があるのと、そうすると、ある時期にある大きな投資がなされた場合には数字が動きますので、ぜひ議論する場合の前提として、長期の議論をするということで、シェア論は予算については大事だとは思いますが、瞬間で比較するのはなかなか難しい。

それからもう1つ、当然これはもう議員御承知でございますが、鹿島では財政再建のための長期の計画を実施中でございます。ちょうど当年度までやるわけでございますが、その中だということと、ほかの市町とは事情が違うということ踏まえた上で議論をしていただくといいんじゃないかと。

それと基本的に私は、シェアというのは余りこだわると危ないなと思っております。どうということかといいますと、先ほど言いましたような1億円動いたらすぐパーセントの単位で響いてくるというような母数のときにこれをやりますと、本当の中身を見誤ってしまうということなので、いろんな条件のもとではございますが、問題は何をやったか、何をやろうとしているかと、中身ではないかと思っております。余り瞬間的に数字にこだわると本当の姿が見えなくなる、その心配だけは頭に置いておいていただきたいと思っております。

それから、私の50年前の映画をごらんになった感想を言っていただいております。この映画のことについてはもうコメントいたしません、ちょうど現在の七浦の地先の潟の当時の状況がきれいに映っております。油を流したように輝くような潟の現場が映っておりますが、現在とはやや趣を異にしているという印象を持っております。それは現象的にも当然海産物が減っている。それから、そこをめぐる、例えば流入してまいります川の状況とか、海面で行われているいろんな水産業、そういう状況が変わっておりますから、そういう影響は当然あったんだろうと思っております。

一番は、私がこの前ここでもお話をしましたが、やはり諫早干拓について開門調査をして、現在の状況についての統一的なといいますか、基本的な部分についての理解が確定をしないと、いつまでたっても水産業をめぐるいろんな議論が空回りをするし、不完全燃焼に終わってしまうという印象を持っております。

人口につきましては、担当のところからお答えをさせますので、お聞き取りをお願いいたします。

○議長（橋爪 敏君）

藤田企画課長。

○企画課長（藤田洋一郎君）

松本議員のほうから人口の減少傾向について月別のデータを求められまして、その中で4月から主に2月ぐらいまではほとんど増減が少ない。そして、3月になると急激に減少が大きいと、そういう傾向があるというような、これはどういうことととらえているのかという御質問だったと思います。

これもちょっと徳村議員の御質問の折にお答えいたしましたように、基本的に人口の増減は自然動態、出生数が増、それで死亡者数が減という動きと、それから、社会動態といいまして、転入者、出生とかじゃなくて転入、よそから転入される方の人数、それから、鹿島市から転出される人数、その増減、この2つが合わさって人口の増減がついていくということでございます。

そういうことでいきますと、やはり、自然動態はあくまでも生まれられる、それから亡くなられるというのは、ほとんど余り月ごとでの増減の大きいものではない、毎回結果的には月々の生まれる方、それから月々亡くなられる方はほとんど月ごとでは異動はない。やっぱり大きいのは社会動態の動きだろうととらえております。

そういうことでいきますと、3月にはまず社会人の方の異動ですね、職場が変わられるという中での、もちろん鹿島の営業所のほうに転入される方もありましようし、よそのところに転出される方がいらっしゃる、その動きですね。それと、やっぱり鹿島として大きいのは、新卒者の就職、それから進学、このあたりがこれはもう従来鹿島市が、昭和29年鹿島市になっておりますけれども、それ以降、統計をずっと見ておりましても、この増減というのはどうしても、社会動態のほうの減というのはずっと大きいということだろうということで認識をしているところでございます。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

さっき市長からお答えがありましたように、私もそのように考えておりましたけれども、ただ、短兵急にということではちょっとだけ調べたもんですから、そういう質問になりました。今後、もう少し勉強を重ね、深く調べてからのお尋ねといたしたいと思います。

それでは、まず第1次産業関係で質問を始めたいと思います。

今現在、中山間地総合整備事業が終わりに近づいているかと思えます。やはり七浦、嘉瀬ノ浦、竜宿浦地区で開かれて、土づくりというふうな形を今とってもらっていると思えますけれども、本当によかったんじゃないかならうかと思えますが、関連作物をことし導入されて、

立派な生産物が取れているというふうな状況もありますけれども、この実際の実施中の状況がどういうふうであるかということと、この中山間地域整備事業というのは、佐賀県で取り組まれたのが多分平成の初めごろからであったんじゃないかならうかと思います。私も農業関係で仕事をさせていただいておりましたから、どこにおったかは思い出せませんが、県内各地でこの事業に取り組もうということでやっておられた、鹿島が19年から24年までではなからうかと思います。最終になっておるかと思いますが、その辺の経緯と今の状況がどういふふうになっているかということをお尋ねいたしたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

森田農林水産課長。

○農林水産課長（森田利明君）

お答えいたします。

中山間地域総合整備事業の推進計画の経緯、それと当事業が若干遅延したという、そこら辺の理由のお尋ねかと思っております。

申しわけございませんが、何年ごろから推進をしていたかというようなことでございますけれども、その辺がちょっとはつきりわかりませんが、中山間地域総合整備事業は単発的な事業じゃなくて、メニューも多岐にわたっております。そういうことから、しっかりした事業計画、しっかりした事業実施後の目標がなければならないという採択条件がございます。また、国及び県の補助率が高率ということもありまして、県内でもかなりの事業要望があったと聞いております。県内どこの市町村においても採択要件のクリアのため、相当の期間を必要とされておりました。

これらのことに加えまして、地元の合意形成が熟成されておらず、地元の意見を集約するのに時間を要したことも事業申請が遅延した要因の一つと考えられます。しかし、皆様のおかげを持ちまして、結果的には事業計画のとおり、1つの事業の中止もなく順調に事業が推進されておるところでございます。

現在の進捗状況について申し上げます。

最初に全体概要について、参考までに申し上げます。

事業年度が平成19年度から24年度までで、総事業費が1,040,000千円となっております。

続きまして、平成19年度から21年度の事業内容について申し上げます。

事業費で平成19年度が70,000千円、平成20年度が2億円、平成21年度が362,000千円、合計が632,000千円で、平成21年度までの進捗率でございますけれども、事業費ベースで61%となって順調に推移いたしております。

また、事業の内容でございますけれども、農業生産基盤整備を主に西塩屋地区、鮎越地区、大野地区、一本松地区、大宮田尾地区、竜宿浦、嘉瀬ノ浦地区の圃場整備、それと中尾地区の農業用排水路整備及び農業生産環境整備としまして、七浦地区の飲雑営農用水と西三河

内、大木庭地区の防火水槽の整備を実施いたしております。

続きまして、今年度、平成22年度ですけれども、の予定について申し上げます。

概算事業要望といたしまして、270,000千円が要望をされております。

事業内容でございますけれども、事業生産基盤整備であります圃場整備、それと農道整備を主といたしまして、農業生産環境整備の集落道の整備が予定をされております。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

今、総合整備事業が24年で終わるということであるわけですけれども、いろんな条件で採択にならなかったところもあります。私の家は川下ですから、川上にいい圃場があるものですから、そういうことで、いろんな形で前市長も対応をしていただき進捗を今見ておりますけれども、それでもやはりもうちょっと手が届かないなというふうなところが二、三カ所あります。ぜひいろんな中で、やはり条件整備、後継者問題にしてもそういうことになってくるんじゃないかと思っておりますので、この総合整備事業と同じような第2弾的な事業があれば幸いかと思っておりますけれども、第2弾の中山間地域総合整備事業樋口モデルというふうなどがなかろうかという気もするわけですけれども、ほかの事業で取り組むとしたらどういうことでしょうか。

○議長（橋爪 敏君）

森田農林水産課長。

○農林水産課長（森田利明君）

お答えいたします。

圃場整備にのれなかったところについては、ほかにどのような事業があるかという御質問と思われましてけれども、中山間地域総合整備事業で対象とならなかった地区の基盤整備事業につきましては、補助率が若干低くはなりますけれども、農山漁村活性化プロジェクト支援交付という補助事業がございます。目的、受益面積、事業量など、目的に合ったさまざまなメニューがございます。

整備メニューといたしましては、主に圃場整備、農業用道路整備、農業用排水路整備など基盤整備ができます。採択要件といたしましては、受益面積がおおむね5ヘクタール以上であり、事業終了後、担い手への農地集積等、また、農業用排水施設等の整備保全が見込まれるものとなっております。農地集積につきましては、事業採択時の集積状況に応じて目標ポイントを設定し、増加するよう努めるということになっております。また、基盤整備につきましては、土地改良法の手続を伴い、佐賀県では受益者すべての同意が必要ということになっておりますので、1人でも理解が得られないということになれば、事業に取り組むこ

とができませんので、一応申し添えておきます。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

事業内容等でちょっとひっかかる点もあるわけですが、受益面積が5ヘクタールとか、そういうところがちょっとクリアできないところもあるんじゃないかなろうかというふうなこともありますから、その点、離れても、飛び地でも5ヘクタールでよかですよとか、そういうふうなこともあればという気もいたしますし、また、ことしの異常気象と言うぎ異常気象でしょうけれども、3月の春先の低温なり曇天、また雨が多かったといいますか、排水不良ということになりますけれども、ことし、タマネギが私はまあまあだと思えます。タマネギがことしはよかと言う人もありますけれども、これぐらいが当たり前じゃなかろうかと思っておりますけれども、その中でも早目に、もう3月のうちに出荷をして金を取りたいというふうな取り組みをされた中で、やはり排水が悪いところが水がたまって根が傷んで、玉が小さかった、単価の割には量がなかったというふうな、そういうふうなところもありますし、やはり先日の先輩議員の質問の中にもあっておりましたけれども、やはり排水がいいところは、本当に麦の種子がとられていたんだということもあるようですけれども、やはり排水をよくするというふうな、まだまだ昨年まで北鹿島を中心に排水対策事業が行われ、喜んでおられるかと思えますけれども、まだまだ受益面積というのはありますから、ぜひやってほしいという需要面積ですか、ありますので、ぜひそういう点も考えて対応をしていただければと思います。

続きまして、後継者ということになります。

先般、鹿島地区内の農協青年部の盟友、今現在170名というふうなことで、かなり数が減っている、それこそ半分ぐらいになっているんじゃないかなろうかと思えますけれども、これもまた昨日徳村議員が若者の鹿島市内での起業ということで言われておりました、ああ、農業の後継者も起業者たいと、本当に新たに起業をされるんだという思いで、今までのように水田なら水田、ミカンならミカンをそのまま親さんから引き継いでやっていけるという状況ではありませんから、新しい農業、起業家というとなまえ方ができるんじゃないかなろうかという思いを、先般の徳村議員の質問を聞いておりました。

そういう中で、農業の起業家に必要なのはというようなことも考えておりますけれども、やはり樋口市長も言われております。JAと県普及センター、そして市の農林水産課、農業委員会、この三者がやはり一緒になってということをやられておりますけれども、ここ数年、私もずっと関心を持って見ておりますけれども、やはり市の農林水産課の中で、そこに農業への、企業者への手助けとか、誘導とか、その辺が少し足りないんじゃないかなろうか。

やはり普及センターの職員さん、専門員さんと一緒になって圃場へ出向き、そして後継者、企業家と同じ目線でタイアップしてもらえる、そういうふうな、できれば市長直属みたいな職員の配置等、考えられないでしょうか、お尋ねをいたします。

○議長（橋爪 敏君）

中川産業部長。

○産業部長（中川 宏君）

お答えいたします。

農業企業者に必要なのはJAさん、県の普及センターということで、その三者が一体になってやらなければならないということです。市の体制がおくれているのじゃないかということでございます。

現在も当然JAさん、県の普及センターさんとは連携して農家の方々の相談を聞いているところでございますが、議員の御質問は、担当者を配置して、その充実をということであると思います。その重要性は担当課としても認識しておりますが、即そのために人員配置ということは現在の市の全体の職員数からいって難しいものがあります。三者の連携による相談体制充実などの必要性は感じておりますので、当面、今のうちのかかわり方がどうなのかを検証して、現行体制の中で充実を模索させていただきたいと思っております。

以上です。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

わかった上で質問をしているわけですがけれども、多分、中川部長が総務課長のとき北村部長が職員の人員配置数の件で農林水産課がちょっと少ないんじゃないか、厳しいんじゃないかというような質問を私が先般3月か12月にした折に、内情を各課長にお尋ねをして、それなりの配置をいたしますというようなお答えをいただいておりますけれども、多分、考慮はしていただいたと思っておりますけれども、実施までには至っていなかったんじゃないかという気がしたものです。市長が最初に副市長問題で副市長選任を今議会でというようなことを言われました。できればそういう面も踏まえて7月人事でもというような御期待をしているところであります。

変わりがまして、続きまして、今起業家の問題で、それに伴う後継者の一生の友、嫁さんが今かなり困窮していると言うぎいかなですがけれども、今はシングルライフというのがはやっておりますという言い方が悪いかもしれませんが、そういう状況でありますので、JAで婚活ということをもた再任させてもらっております。支所長のKさんが婚活を考えておられるようですが、先般の新聞にも伊万里市が婚活課とか、武雄市がお結び課とか何とかというようなニュースにもなっていますが、鹿島市内でも20年ぐらい前、これもま

た二昔ぐらいになるわけですがけれども、そういうふうな趣のある取り組みを藤津郡いっぱい  
ででしょうか、されていたんじゃないかならうかと思えますけれども、現在の状況、その辺の過  
程からお伺いをいたしたいと思えますけれども。

○議長（橋爪 敏君）

農業委員会事務局長。

○農業委員会事務局長（松浦 勉君）

婚活の現在の状況ということでのお尋ねだと思います。

農業委員会のほうで平成の初めごろ、婚活ということでの事業を数年なされております。  
例えば募集をかけてハウステンボス等へ1泊で行ったりとか、いろんな方策をとられてきた  
ところですがけれども、なかなか実ったというか、回数等の問題もありましようけれども、な  
かなか実現に結びつかなかったというふうな話を聞いているところです。

それから、農業委員会が終わった時点で、広域圏で出会いの場づくりということでドリ  
ムキャッチ12ということで、フォーラム12というところが主体とした実行委員会で開催され  
ておりますけれども、これは農業後継者に限った出会いということじゃなくて、広域圏での  
全体的な独身者を対象に開催されてきたところです。大体年2回ほど開催されておりますけ  
れども、男性40名、それから女性40名のパターンで開催されているところだそうです。これ  
までに二十数組まとまっているというふうな状況で聞いているところです。これにつきまし  
ては、今後、まだ開催されていくというふうな状況にあるところです。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

今、この近くで具体的にやっているようなお話をちょっとしましたが、この婚活に、つま  
り、農村の花嫁問題ということで、ちょっと私は昔担当の局長をいたしておりましたので、  
その経験を御紹介しておきたいと思えます。

2つ話をしますが、1つは農村の花嫁問題は、実は受け入れる農家の側に問題があるのか、  
そこに行くとか行かないとかを決める女性の側に問題があるのかということをお見  
てみたいと思ったんです。それで、東京で正確な数字はちょっと今手元にはございませんけ  
れども、700名ほどの女子大の生徒、全く農村とか農業に関係のない生徒さんに集まっ  
てもらいましてアンケートを実施したことがございました。自分たちは農業、あるいは農村とつき  
合ってみたいか、もう端的にお嫁さんになる気があるのか、ないのかというようなことを調  
査をいたしました。そして、当時3高というのがはやっ  
ていまして、収入が高いとか、身長  
が高いとかっていう話があったんですが、私どもは当然農村というのはやや拒否反応が出る  
のかなと思ながら調査をしたことがございます。そうすると、実は思いがけない結果が出  
まして、農家に行ってみたい、あるいは興味があるという数がかかなり多くございました。そ

の原因をいろいろあったんですが、2つ御紹介をしておきます。

1つは、彼女たちのライフスタイルといいますか、基本的に夫婦が中心になるので、子供は何といいますか、一緒にずっと過ごすということではないような対象として考えていると。別の言葉で言いますと、3世代、住居の中に住むことが全然拒否反応がなかったのはなぜだろうと聞いたら、子供が生まれたらじいちゃん、ばあちゃんに預けて、我がたちは2人で遊びに行き、カラオケに行ったり、旅行に行ったりできるから、むしろじいちゃん、ばあちゃんが施設の保育所のごとして、そっちのほうが東京で2人でアパートを借りて、かわりばんこに保育所をめぐってみたり、そういう超勤もできんような状況にいるよりはいいんじゃないかというのが1つございました。

それからもう1つは、その女性の皆さんの関心が健康な食品というのがどうも頭にあったようございまして、市中で流通しているいろんな食品を買うよりも、目の前で自分たちがつくっている、あるいは知っている人がつくっている、そういう食材が目の前にいっぱいあるわけですね。そういうものを確認した上で食べられるというのは非常にメリットだということで、農村に対する興味の対象がその2つだったんです。

ところが、今度は拒否といいますか、非常にマイナスイメージで抱かれたのを今度2つ御紹介しておきますと、1つは、万一病になったときに、ちゃんとした治療を受けられるだろうかという心配が1つあるということでございました。それからもう1つは、望みどおりの教育といいますか、学習が——自分の思ったとおりの教育施設が近くにあるのだろうかということがあったんです。

そのことをちょっとここで御紹介するということではございまして、おもしろい提案がございまして、農村に嫁さんに行くならぜひやってもらいたいことは何かと書いたら、1つございまして、家と自分の農地といいますか、耕作地の間に更衣室をつくってくれんかという話があったんですよ。何だろうかと思っていたら、野良着のままで家を出て耕作地へ行って家に帰ってくると、こういうことをしていると、途中で友達に会ってちょっとお茶飲みに行かんねとか、立ち話でもするというようなときに、とてもじゃないけど応じ切れない。つまり、適当なコミュニケーションがなかなかとりづらいので、どこでもいいけど、とりあえず切りかえるためにはやっぱりファッションだということですよ、そういうのがあったらいいんだけどという注文があって、こういう話もできるかできないかは別として、関係の皆さんにお知らせをしたということであります。

つまり、私はどっちかと言うと嫁さんのほうに高いハードルがあるのかなと思いつつこの調査をやったんですけれども、実は事前にそういうのをやったこともなければ、事後やったこともないので、たった1回の調査でどう判断するかというのはなかなか難しいとは思いますが、そんなに嫁さんになる母体といいますか、グループのところに悪いイメージはないんじゃないかなということをおもったというのが一つございました。

それから、そのころあわせて農村に具体的なそういうシステムなり場所がないだろうかということで、私自身が予算化をしましたのが、そういう結婚相談所を開かれるときの女性が何か補助金ですね、できないかということで予算化をしましたのが、鹿島市にも1カ所予算がついたはずでございまして、田澤記念館に結婚相談所というのが設けられているのは御承知だと思いますが、あれはそのとき予算化したものが採択になって、こちらに一定の事務とか事務費とか来ておるはずでございまして。具体的な行動については、余り活躍されたということは聞いておりませんが、今お話がございましたし、もう一回そのことを聞いてみたいなと思っているところでございまして。考えまして御報告をしておきます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

ありがとうございます。松浦委員長、今の市長の都会の女性は嫁に来ると言いよつということじゃなかったらと思います。ぜひ企画をお願いしたいと思いますが。

そしたら続いて、やはり現在一生懸命生産物、生産努力し、収穫間近、目の前になって生産意欲の減退、阻害をしているのがイノシシです。本当に喜びの秋、この喜びを根底から奪い去るイノシシ被害。殺してしまうということもできるかもしれませんが、なかなか難しいと思います。反面、副作用も出てくるというふうなことじゃないだろうかと思いますが、簡単にはいかないんじゃないかなと思いますけれども、樋口市長が鹿児島県庁出向時に出水のツル、今話題になっておるツルのことを聞いたことがありますけれども、今回の口蹄疫対策とあわせたような形でイノシシ撲滅じゃなかですけれども、イノシシ隔離対策というか、そういうふうなアイデアというか、モデル事業等はできないだろうかなという思いがしますけれども、市長、お尋ねいたします。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

質問はイノシシだったんですが、ちょっとその前提を話さんと多分おわかりにならないと思いますので、ちょっと長くなりますがお許しを願いたいと思います。

いろんな病害虫ですね、菌でございましてかウイルスでございましてか、あるいは動物体自身が被害を与えるということがございまして、私自身が経験をしましたのが、南西諸島におりますウリミバエという、端的に言えば虫ですね。これはウリとかそういう植物につきます虫でございまして。それから、人間がつくったものを何でも食ってしまう猿というのがおまして、これは屋久島の猿を頭に置いていただければいいのじゃないかと思います。それから、出水地方で冬になりますとたくさん飛来しますツル、これを私自身、自分で体験をして

いろんな対策をやったんでございますが、率直に言って猿は失敗しました。失敗しましたというか成功いたしませんでした。これはなかなかいろんな事情があります。この場でお話をする余裕はございませんが、これはうまくいかなかったんです。ウリミバエは徹底的に防除するというので、これは成功いたしました。したがって、南西諸島から内地へ、本土のほうへ移出ですね、持ち込むということが可能になったということでございます。

ツルについては、多分今お話しされたのは、イノシシとの関連でないかということでございますが、ツルについては、これは出水だけじゃなくて、越冬するために北から冬になると飛んでまいります。出水の地方に限りますと、大体江戸時代から来ていたんですが、少ないときは200羽来たり、多きときは1万羽来たりというようなことで、いろんな事情があったんでしょう、ふえたり減ったりしておりました。そのツルが戦後、朝鮮半島に南北境界線が敷かれたら、どうもあの辺に行くというのが、やっぱり彼らも回避をしたんでございましょう。鹿児島に突然たくさん飛来するということになりまして、昭和50年代の初めごろに大変難儀をしておったわけなんです。大体50ヘクタールから100ヘクタールぐらいのところ集中的に飛んでくると。ちょうどそのころ種まきがされているということでございますから、これは困った困ったということだったんですが、もちろんこういう事業は私1人でやったわけじゃございませんが、いろんなアイデアを出したり協力を仰いだりしたことを御紹介します。

撲滅するとか、とにかく全部覆ってしまうというのは難しいだろうと。こういう植物体を守るためには、おおむね3つの方法があるんじゃないかと私は思っているんですが、1つは来るのを全部撃ち殺してしまうという、どっちかというウリミバエ方式みたいなもんですね。それから、もう1つは植物体を完全に覆ってしまうと、もうハウスか何かになってしまうという防御の体制ですね。それから、ここで、出水で編み出したと言うといけません、実証された一種の犠牲バント方式といいますか、ツルの場合は天然記念物であるということもありましたので、全部殺すというわけにもいきませんのでどうするかなということで、少数の農家の人にどちらかという犠牲になってもらって、そこに集中的に彼らが好みますもみとか、小麦の規格外のもの、あるいは大豆の余ったものとかをある限られた田んぼに集中的にまきまして、そこにいわば事実上押し込めてしまうと、この人たちも学習効果が上がりますから、翌年来るときはもと来た田んぼのほうへやっぱり行くと、子供を連れてくるということになりまして、だんだん、だんだん数年たちますとほかのところに行かなくなると、最初、これをまきます農家が何でうちの田んぼばそがせんばいかんやろうかて、一種の何かこう拒否反応があったんですけれども、だんだん、だんだん自分のところの田んぼに来るようになったら、何か双眼鏡を用意してお金を取ったりとか、いろんなことで結構これを商売しておられるみたいな話がありまして、最近はまだ既に定着をしているようでございます。一種のすみ分け方式ですね、犠牲の部分をつくってすみ分けると、共生の方式だと言えると

思います。

イノシシについても、実は考え方は同じじゃないかと。全部撃ち殺してしまうということもありますが、なかなかそうは簡単に——今度の口蹄疫でおわかりのように、大体どこにいるかわからんし、何匹いるかわからんということでございますから、この防除を完全に徹底的に根絶やしにしてしまうというのは難しいと、そういうことでございますから、何かしら特定の樹園地、あるいは特定の山を限定して、そこに誘導して作物に出てこないような方式がとれないかどうか。そのときに物理的にやるのか、彼らが非常に好みません薬品がございまして、カプサイシンとアリシンというのがございますから、こういうのを有効に使って誘導できないかということで、今製薬会社、それから動物関係に詳しい人に提案をさせていただきます。

なかなか難しい面もあると思いますが、こういうものは手をつけないと動かないというのがございますから、そういう誘導装置、あるいは強制的な部分ができれば何かしら対策の一助になると。特にイノシシの場合は口蹄疫でおわかりのように、もはや一地域とか、一自治体で対応できる限界を超えていますので、この話を国なり、あるいはもうちょっと高いレベルに言って、何かしら別の方式を模索して、中部以西はほとんどイノシシに悩まされております。何かそういう方式でもできないかなと思って議論をしております。

現に、この土地には非常にそういう新しい方式なり、新薬の開発に熱心な製薬会社もございますので、そういうところに既に一応話はしてございますが、どういう結果になるか、私自身はその推移を見ているということでございます。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

ぜひ——口蹄疫がイノシシにうつたらという心配を先日されていたと思いますから、やはり畜産をされている農家のちょっと地図をいただきましたけど、ここら辺とのすみ分けをイノシシはちょっと特に豚のおらすところには近寄り、欲しか豚はちょっと貸すよというふうなこともしてもらえれば、すみ分けができるんじゃないかなろうかというような、出水のツルじゃなかですけれども、イノシシ見や鹿島に来たばいというような、そういう夢みたいなことを言うておりますけれども、できればなという思いで今質問をいたしました次第です。

続きまして、有明海保全についてお尋ねをしておりましたけれども、市長、幼少時代の潟、やはり本当に潟が光っていた、ああ、なるほど、本当だなという思いを、いい表現をされましたけれども、今何かべちゃったような感じを受けておりますので、家庭排水等もかなり影響があるんじゃないかなろうかというようなことでお尋ねをするようにしておりましたが、先日、水頭議員がやはり浄化槽の設置、特に有明海地先、七浦、浜、北鹿島、そういうとこ

ろでぜひ対応をしていただければという水頭議員への後押しじゃなかですけれども、そういうこともお願いをしたい。今の状況ではとても個人で幾らかの補助をもらって浄化槽設置というのは難しいんじゃないかという思いで申し上げております。4月から新任の福岡課長の所信を一言お伺いいたしたいと思えます。

○議長（橋爪 敏君）

福岡環境下水道課長。

○環境下水道課長（福岡俊剛君）

松本議員の質問にお答えをいたします。

下水道の浄化の関係ということでございますけれども、今私どものほうで進めておりますのは、市内のほうにつきましては公共下水道事業を進めていると、それ以外の区域につきましては、きのうの水頭議員のほうへも回答いたしておりますけれども、補助金等を補助しながら浄化槽、これは年間50基程度ではございますけれども、そういうふうな事業を進めながら浄化のほうへお願いをしている状況でございますので、今後ともこういうことで進めながら浄化に努めてまいりたいと思っております。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

福岡課長、よろしく願いしておきます。それ以上のことを期待しておりますので。

それでは、人口減少についてということで答弁をいただきまして、私が思いついたのは、課長の答弁の中にもあったかと思えますけれども、3月末の提出ということ踏まえて私なりに考えた末、特定ではありましたが、高校卒業生の就職先ということを考えました。地元にはいろんな学校、優秀な高校がありますけれども、その中で鹿島実業高校、ここ小池議員が同窓会長をされておりますけれども、本当にすばらしい高校じゃなかろうかと思えます。

進路指導主事の藤井先生という方に前もって電話をして調査をお願いして、会いに行きました。そのときに名刺を出されてびっくりしました。先日の馬場議員の名刺入れじゃなかですけれども、藤井先生が面浮立の半分ついた名刺を出されて、本当にうれしい思いがしました。鹿島の面浮立でもありましたし、私じゃなかったですけれども、私も数年母ヶ浦面浮立の一の面をさせてもらってございましたから本当にうれしかったわけですけれども、やはりこの面浮立が進路開発じゃなかですけど、企業さんに行ったとき名刺を出すと、すぐそのとっかけで話ができるというふうな、いいことだなということで、馬場議員が先日言われていたことが如実に私の目に入りました。

聞いておりますと、大体鹿島実業高校で毎年150名前後卒業されております。その中で就職希望者のほぼ100%が就職をされている、これもまたすごいことでもあります。そこで、21

年度だけ、22年3月卒を見ますと、144名の卒業生のうち、就職希望者が95名だそうです。県外が38名、県内が56名、56名のうち市内が23名ということです。5カ年を見ましても大体同じような傾向で、そして教育委員会のほうでも調べてもらいましたが、大体50名ぐらい東部中学校、西部中学校から実業高校に進学をされている。鹿島市内に20名がされているということですけれども、全員の方が鹿島市の人ばかりじゃなかじやなかろうかなという気がします。その割合からすると150名うち50名ですから、3分の1としますと七、八名が鹿島市在住の方じゃなかろうか、あとは50名のうち残りは県外に、単純に計算しますと50名から七、八人引きますと四十数名、40名ばかりは市外へ転出をされている。実高の場合は女性の方が主体というふうな状況でありましたので、そしたら男性のということで塩田工業へ同じようにお尋ねをいたしました。

そこで先生が言われたのは、塩田工業出身者は粘りがあり、やはり途中でやめない。進路指導の先生が有田工業におるころ、そういうふうな就職活動で企業に出向いたとき、そういうことで「塩田工業には求人を出しますけれども、あなたには出しません」と言われてがっかりしたというようなことで、今は塩田工業におるといふようなことを言われておりましたけれども、本当に市長も言われておりましたが、根気強く粘りがあるというか、そういうふうなことを言われて、塩田工業でも大体150名前後が卒業生、その中で21年度3月末を見ますと鹿島市内に7名です。22年3月末で鹿島市内へ就職されたのは7名だそうです。大体10名ぐらいということですね。県外に83名というふうなことで言われました。塩田工業高校へ鹿島市内から50名前後進学をされておりますけれども、単純に7名が鹿島市出身の方ばかりだと見ても、50名から7名引きますと43名ですから、ここでもまた40名ばかり鹿島から出て転出者というふうなことになっているんじゃないかというような思いもしましたけれども、そしたら、進学高校、鹿島高校ではどがんやろうかなという思いがして電話をいたしましたら、21年度卒業生で鹿島東部中学校、西部中学校出身者が106名おられるということですが、県内に18名、何と残り88名は県外、一概に鹿島を転出されたとは限らんとお思いますけれども、高校卒業生だけでも150名というふうな実態、本当にそういうことになるんじゃないかと思っておりますけれども、ぜひこの卒業生が残れるような対策を第1次産業の企業家というとも就職先になっとなつてはすけれども、市長、そういうことでどういうふうにお感じになられたでしょうか、お尋ねをいたします。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お話があった数字はそのとおりだと思います。したがって、私が就任します際にお話をしております定住とか、それから若い人たちの企業、これについて力を入れていきたい。実はその前提となる社会的な動き、まさにそういうのを見てこういう対策をとりたいと思

っているところでございます。

いずれも現在市役所の中にプロジェクトチームをつくって、早急に具体的な対応をしたいと思っております。この検討の中に期待をしてくださいというのも変でございますが、ぜひそれに注目をしておいていただければと思っております。私もできるだけ力を議論の過程、それからまとまりましたものについて力を注いでいきたいと思っております。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

これは教育長にお尋ねですけれども、今回、鹿島実業高校なり塩田工業を訪問しまして、本当にうれしい思いがいたしました。根気強い、日本に誇れる生徒、社会人が育っているということを知り、小学校、中学校教育において、学業面だけでなく、樋口市長のような東大を出て国政の根幹にかかわり、ふるさと鹿島を思って帰ってきてもらう人もほんの一部は必要だと思えますけれども、鹿島実業高校なり塩田工業高校、ほかにも佐賀農業高校、嬉野商業等もありますけれども、そのごとくじゃなかろうかと思えます。

今後のやはり中学校教育においても、ぜひそういうふうな高等教育だけでなく、やっぱりそういうふうな実業を兼ねた——今後、本当に必要な、本当に必要というか、今から需要がふえると思えますけれども、看護関係、福祉関係の——先日、鹿島実業高校に行ったときに、その生活経営科コースがなくなるんだというような話を聞いてびっくりしましたけれども、その面も踏まえて、今後の教育について、ぜひ教育長の信念を持ったところの方針をお伺いしたいと思えますけれども。

○議長（橋爪 敏君）

小野原教育長。

○教育長（小野原利幸君）

鹿島実業の生活経営科、これは今3年生だけしか在籍していないということは、23年度にはもうなくなるということになるかというふうに思います。この募集停止になることについては、もう本当に正直、残念な思いであります。

この生活経営科というのは、今おっしゃったように介護とか福祉、あるいは服飾デザインですか、こういったものがどちらかというところと即社会のニーズにこたえられるといいますか、そういう資格とか、技術の習得を目指して学んでいるという学科ですね。だから、40人の定員に対して、今鹿島市内の中学校から3割程度、3割前後が毎年入学をしているとありますので、今後においてそういう子供たちがいることは想定されながらも、その学科がないということで大変希望が満たせない、ある意味かわいそうな思いがあります。

ただ、県立高校ですので、定員とか学科をどうするかということについては、全県的な中学校の卒業生の数とか、学校の配置のバランス、この辺が考慮されて、県のほうで策定をし

て決定するものでありますので、ある意味もどかしいですけれども、いたし方ないというところもあります。

ただ、議員が申されるように市内の子供たちが、できれば地元の学校に行ってほしいという願いは私も全く同じですが、今後、こういうふうな学科の改編等について、決して手をこまねいておくわけにはいきませんので、これまでもそうでありましたけれども、私などででき得る地域の声とか実情を訴えていく、つないでいく努めというのはこれからも怠りなくやっていきたいというふうに思っております。

○議長（橋爪 敏君）

3番松本末治君。

○3番（松本末治君）

時間ですので、最後にしたいと思いますけれども、樋口市長に先日政治評論家の福岡政行先生が3月の講演の際であったろうと思いますけれども、今の現政権は5月末で終わるだろう、次は菅政権だろうというような予測をされましたけれども、2日ずれたばかりで、そのとおりになったというような思いをしておりますけれども、そのときに鹿島について言われたこと、私の脳裏に深く刻まれておりますけれども、鹿島はよかところだ。今、世間では「コンクリートから人へ」というような民主党政権で言われるようになりましたけれども、そのとき鹿島は「コンクリートも人も」ということを言われたことを思い出します。

鹿島駅前開発等について、先日も言われておったと思いますけれども、ぜひ先日の鹿島の特産品が駅前のあるビルに行けばすべてありますよというふうな、鹿島が全部わかりますよというような展示コーナーというか、発酵の館等々も言われておりましたけれども、それとあわせたそういうふうなところも必要じゃなかろうかということで、ぜひ「コンクリートも人も」という思いで財政基盤強化の中、厳しいと思いますけれども、ぜひお考えいただくことをお願いし、終わりたいと思います。よろしく申し上げます。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

今の言葉は、私の昔からの友人というより、遊び仲間でございます福岡政行が選挙応援に来たときの言葉ではなかったかと思っておりますけれども、私はさらに彼の言葉に――彼は「コンクリートも人も」と言ったと思いますが、私は「コンクリートも人も物も」ということで対応していきたいと思っております。よろしく申し上げます。

○議長（橋爪 敏君）

以上で3番議員の質問を終わります。

ここで10分程度休憩します。11時30分から再開します。

午前11時20分 休憩

午前11時30分 再開

○議長（橋爪 敏君）

休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続けます。

次に、1番議員松田義太君。

○1番（松田義太君）

おはようございます。1番議員の松田義太でございます。

まずもって、樋口新市長の御就任、お喜び申し上げます。市長も述べておられるように、ふるさと鹿島のまちづくりのため、新執行部と議会が車の両輪として有意義な議論、建設的な議論を行うことを心より願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、通告に従いまして、私の一般質問をいたします。

今回私は、1点目に今後の鹿島市の財政運営について、2点目にまちづくりの原点は、人づくりから、3点目に将来への責任として、今、取り組むべき課題とはという内容でお伺いをいたします。既に、先輩議員の皆さんの質問で答弁していただいている項目もありますので、重複する部分もあるかもしれませんが、できるだけ要点を絞って御質問をいたします。

まず、1点目の鹿島市の今後の財政運営についてであります。

市長は、これまでの発言の中で、鹿島市の財政状況は外から見ているより厳しい状況にあるのではないかと述べられました。市長の鹿島市の財政状況の分析を、重く受けとめております。

そこでまず、改めて確認の意味で、内容を整理する形でお伺いをしたいと思います。厳しい状況との印象を持たれた理由を、できれば歳入の部分と歳出の部分に分けて、それぞれの見解を述べていただきたいと思います。

次に、今後の行財政改革のあり方についてお尋ねをいたします。

市長は、今議会冒頭の演告の中で、行財政運営の課題とあり方という項目を掲げられ、市民の皆様に過重な負担を求めることを避け、行政サービスの水準を維持、向上させ、計画的に政策的事業を実施するためには、今後とも不断の行財政改革の努力が必要であり、さらに徹底した体質改善と工夫で効率的な市政運営を図らなくてはならないと述べられております。現在、平成18年から22年までの計画として財政基盤強化計画があり、今年度はその最終年度に当たっております。これについての市長の考えの答弁もありました。

そこで今、市長が考えておられる体質改善と工夫など、今後の鹿島市の行財政改革のあり方として、どのような部分を重点的に改革、改善をしていきたいと考えておられるのか、具体的な構想があればお知らせください。

3点目に、また樋口市政の優先的に取り組む地域課題として10項目を示しておられます。

いろいろな事業を同時進行で取り組み、市長も言われるように時期を逸することがないように実行していかなければならないと思います。

そこで、財源の調達が必要になるわけですが、この際、この地域の浮揚のために、これまでの緊縮型から積極財政への転換という選択肢もあるわけですが、この点について市長の御見解をお伺いしたいと思います。

次に、まちづくりの原点は、人づくりから。

鹿島市の教育環境の今、現状をどのようにとらえ、6月4日から7つのプロジェクトが活動を始められましたけれども、その中で中高一環教育の項目があります。これについての御見解をお伺いいたします。

2点目に、幼稚園・保育園、小学校、中学校との連携についてであります。

現在、鹿島市はどのような体制で、この連携に取り組まれておられるのかお伺いをしたいと思います。

将来の責任として、今、取り組むべき課題とは。

最後の質問になりますが、市長は、この九州新幹線長崎ルート、J R長崎本線問題につきましては、この問題が最大の山場、佳境になっていた2年から3年前、その当時は鹿島を離れ、東京から、ある意味で客観的な立場、冷静な視点で見ておられたと思います。

これまでの長崎本線存続問題、そして三者基本合意、昨年9月の政権交代により民主党中心の政権交代で大幅な公共事業の見直しが行われ、九州新幹線長崎ルートについても前原国土交通大臣の答弁がっております。

その中で、九州新幹線長崎ルートについても、既着工区間を含め白紙の状況であるという発言がありましたし、その後、事業仕分けによって、この長崎ルートについてはフリーゲージトレインの動向を注視していきたいという発言もあっております。

これに対して、市長の演告の中で「新幹線建設は大型で、かつ長期のプロジェクトでありますので、今後の政治経済情勢の変化により大きな影響があると当然、考えられ、その動向は重大な関心を持って見守っていかなくてはなりません。本当の意味で決着するには、まだまだ時間も手続もかかると予想されます」と述べられております。

今日まで約18年間、鹿島市がこの問題について対応をしてきましたけれども、この問題についてのこれまでの鹿島市の対応のあり方について、市長の率直な感想、また見解について述べていただきたいと思います。

これをもちまして第1回目の総括的な質問といたします。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

まず、財政運営について。

これは既にお話をしましたが、私が厳しいなという印象を持ったということは、1つは、この質問には関係ありませんが、他の団体とのいろんな意見交換、私なりにやってみました。というのは、着任した翌日から、もう既に毎日出張に行っているような首長さん方と意見を交換するということがありましたので、むしろそこで教えてもらったというようなことがございましたけれども、それはちょっとさておきまして、1つは、私は財政基盤強化計画、これは非常に評価をしいんじゃないかと、ある意味で2つの意味で敬意を払うところだとお話をいたしました。

1つは、これはダブリますけれども、通常こういう大規模の財政改革をやろうとすると、支出と収入と両面、つまり歳出と歳入と両面から手をつけると、今度の菅、新しい内閣も、まさにそういうこともあって税金のほうに手をつけざるを得ないということにおなりになったように、そういうのが通常なんですよね。ところが、私が拝見させてもらった限りでは、支出の削減に非常に軸足を置いておられるということが、きついんじゃないかなと思って見ておったところなんです。

ところが、恐らく多くの方の長い時間をかけた議論だったので、皆さんが納得をされた上だったと思われまますけれども、この長期計画、予定どおり大体実行されていると評価していると思います。大抵の場合、役所がつくった長期計画、これもこんなことを言っているのかどうか分かりませんが、多くの場合は計画がなかなかそのとおりにいかないことが多いんですけれども、予定どおり実行されていると。この2面で評価をしいんんじゃないかと思えます。そのときに、これが徹底されたものですから、市債残高は減って行って、端的に家庭のことで言うと借金は減ったんですけれども、そうじゃないところで少し満足感に抑え込まれたという印象を持つ人が多かったのかなという気がいたします。

そこで、せっかくの質問ですから、何でこういう計画をつくらないといけないんだろうかと私なりに想像してみました。これは確認をしておりますから、その分は割り引いて聞いていただきたいと思えます。

1つは、この計画が始まりました平成18年度、その前に恐らく鹿島はほかの地域と違う経験をしたんじゃないかと思っています。どういうことかといいますと、合併が不調になっていますよね。いろんな案があったわけです。1つは、当初は、例えば広範囲に武雄とか嬉野とか、そういうところまで含めた案もございました。それから次に藤津、鹿島というような案もあったですね。一番象徴的なのが太良と2つでやるかと。いずれもいろんな経過があって、その経過をお話しすることは余り意味がありませんから、結果的には不調になったと。そうすると予想されるのが、恐らくその後の交付税について相当、抑え込まれるといえますか、減らされるんじゃないかという予想が立ちますよね、当然。それが1点。

それから、当時の鹿島市の職員の年齢構成を見ますと、恐らくかなり、どこの組織も同じ

なんですが、団塊の世代のところはかなりウエートがかかったんじゃないかと。これは、ちょっとデータがなくて申しわけありませんが、そういうふうに想像されます。それで、退職金について相当、原資を積み込まないといけないんじゃないかならうかという、恐らく懸念、予想があったんじゃないかと思います。

何より、ちょうどそのころ、国を初めとして世界的な不況の影響が表面化し始めて、特に中央から地方にそれが波及してきていると。それをもろに受ける役所、市町村のところで数字として出始めた時期がじゃなかったかと。

ほかにあるかもしれませんが、この3つが相まって、このままではとてもじゃないけど市の財政運営はたまらんぞと。夕張が象徴的に言われていますけれども、そんなことに我が伝統ある鹿島市がなっちはいかんという機運があって、恐らくつらいけれども、厳しい基盤強化計画をつくろうじゃないかという背景があったんだと私は想像いたします。そのもとでおつくりになったので、みんなして一生懸命頑張られたと。そういう意味で私は、これは敬意を表すべきものだと思います。

そのときに、御質問は歳入と歳出、両方分けたほうがいいとおっしゃいましたけど、実は、これは御承知でしょうけれども、市町村の場合はあんまりきっちり歳出と歳入を分けて議論するというのは、例えばどういいますか、市の自主財源ですね、というふうな分け方はいいんですが、歳入、歳出で議論するのは、どちらかという歳入が来ることになったから歳出がつくみたいなのがありますね。その議論は、ちょっと私としては余り詳しい議論をしてみようがないんじゃないかと思いますが、数字だけで見ますと歳入はやはり落ちてきておりますよね。歳出で特別な傾向が見られますのは、当然、どちらかという経常経費が相当落ち込んできていると、これは特徴的に言えるんじゃないかと思います。分けて議論すれば、そういうところじゃないかと思っております。最初の御質問は、そういうふうに私は認識をしたということで御了解をいただきたいと思います。

それから、2番目が緊縮的な運営をしておられるというのは今、もう基盤強化計画のところでも申し上げましたから、そういうふうに理解をしていますが、いざ転換をするかどうかという御質問だと理解しますけれども、これはいろんな資料が基盤強化計画にはございますが、庁内版という資料がございまして、その最後のところをごらんになりますと、財政基盤強化計画、すべて同じ資料で説明されたかどうかちょっと自信がないんですけれども、私が持っております「鹿島市財政基盤強化計画庁内成案」というのがございますけれども、この文書編の最後のところ、同じ資料でしょうか、違いますか。（「同じです」と呼ぶ者あり）同じだと思います。

9ページをお開けいただきたいと思いますが、最後のところが、私が実はこの計画を評価し、またありがたいと思っている部分なんです。読みますから同じかどうかちょっと確認の意味で、「本計画の確実な実行により、投資的な事業について、計画期間中（平成18年か

ら平成22年)は、現在の投資レベルを維持しながら改革に取り組み、計画期間終了後(平成H23年から)は、投資的事業に充てられる一般財源を大きく増加させることができると見込んでいる。」、これは同じですかね。

これが実は、私が一番、この計画の中で関心を持ちました部分でございまして、どういうことを意味するかというと、平成23年、計画期間が終了した後は投資的な事業に充てられる一般財源が大きく増加すると。別の言葉で言いますと、来年度から投資的な事業には一般財源、もうちょっとつぎ込んでいいよということを別の言葉でこれは言っているわけなんですよ。そうするかどうかは、当然、私に与えられた次の23年度の予算案を皆さんにお示するタイミングで決定をしないといけないと思いますが、少なくとも懐はこれだけ広くなったと。これはもう前市長のといえますか、後任であります私に対する最大の置き土産だと思っております。

したがいまして、このとおり実行するかどうかというのは、またその時点の判断があると思いますけれども、現時点では、かなり23年度予算の編成については、この縛りがきかなくなっているなという判断をしているということだけは、ここでお話をしておきたいと思えます。

それから、中高一貫についてでございますが、これはほとんど詳しいことは別途、教育長からお話があると思いますが、中高一貫をこのプロジェクトチームで取り上げたという理由だけ、特に背景だけお話をしておきますと、御承知のとおり、太良が今そういうことになっておりますですね。ただ、あそこの中高一貫は、ほかの地域とやや趣を異にしております。

どういうことかといいますと、併設型とかいろいろ型を呼びますけれども、わかりやすい言葉で言うと、設置者が違うんですよね。高校は県立、中学校は町立です、あその場合は、そうすると、どういうことが起きるかといいますと、関連的には連携をとってちゃんとやろうとなっておりますけれども、実態としては自治権はそれぞれ別の人が持っていますよね。予算も別の人がつけるということですから、本来、中高一貫教育が予定をしております、1つの思想で組み立てられた6年間をまとめた教育方針により勉強するということがなかなか難しくなってくるというのが理論の話ですよ。実態としては、やや募集人員等々の事情があって性格が変えられるということが前提になっております。

しかし、あの中高一貫教育そのものについては評価をする向きがございまして、この地域でも何とかして残せないか、もしなくなったらもっと遠いところに通わないといけなくなるということもありますから、そういうことも踏まえて本来の設置者ではありますけれども、県のほうへどういう相談をしたらいいか、あの高校がもう衣がえをします期限が迫っていますから、むしろこれは期限が先行して早目に結論を出したいなということで、むしろ私は教育長のほうにお願いをしているということでございます。

それから、いろんなところとの連携その他という話がございました。

これは、連携をとるときも私はトップセールスと同じように、やっぱり代表になる人がそういう連携をとっていることがわかるような形で出ていかないといけないんじゃないかと思いますが、この1カ月間にもう佐賀の市町の首長、それから九州の市長会、全国の市長会、それから私が単独で県庁の部長さん以上の会合に呼ばれて、口蹄疫ですけれども、説明をしたというのを含めて、かなりいろんなところと話をしている中で私が気づきましたのは、ひょっとしたらそのところに少しいろんな理由、環境があったんでしょうけれども、もうちょっと頑張ってもよかったのかという印象を持ちましたので、そういうことをお話をしたということでございます。

それから、新幹線のお話がありました。

これはいろいろ意見があるので、私はペーパーに書いてお渡しをしたということですが、さらに重ねてお話があるとすれば、別の言葉で言いますと、JRにも県庁にも行ってこういうお話をしたんですけれども、やっぱりいろんな実情を説明したほうがいいと。それで、鹿島の実態を話したときには、鹿島では単に計算に合わんじやないかとか、無理を言うとか、わがままを言っているんじゃないよと。歴史的な経緯ですよ。

もう1つだけを例に挙げますと、鹿島の駅に私が執着をしていますのは、あれは単に鹿島の玄関だということではなくて、鹿島の駅が本来なら昭和5年にできるときに、鉄道省の予算である倍の投資がされるはずだったんです。それが鹿島駅と浜駅に分けて、何も鉄道省は面倒を見てくれなくて、予定された予算をもう真っ二つに割って、鹿島と浜につけてしまったと。そういうことからして地元は一生懸命それを支えたんだと。そういう歴史を見た上でやってくれという、そういう鹿島の人を抱く思いですね、それをちゃんと見てくださいねということで議論をしておるつもりでございます。

それから中身はなかなか申し上げられないんですが、外部応援団からいろんな話があります。その中のアイデアが採用できるかどうか、これはちょっと時間がまあ、あるとも言えますから、その実現について私はそれなりに努力をしていきたいと思えます。

ただ、二、三年前がピークだったとおっしゃったんで、その点だけお話をしておきますと、私は、実は二、三年前がピークだったんじゃなくて、本当はピークはもうちょっと前にあるかなと。ストレートに言えとおっしゃったら、そうだと思います。

それから、私なりに外から見ていて、こういう大きなプロジェクト、それを相手にして仕事をするときには、大きな戦略とか戦術、しかもそれはある程度、例えば鹿島市というのは3万人の人口を擁していて議会もおありになると。そういうところにはどの段階か、どういう人たちにか、やっぱり戦略、戦術というのが公開されてよかったのかなと、これは印象でございます。もう昔のことを振り返ってもしようがないですが、そういう印象を持って見ておりました。最後のところは、印象だけです。

○議長（橋爪 敏君）

小野原教育長。

○教育長（小野原利幸君）

中高一貫教育について、お尋ねに対する大まかな趣旨については、もう市長から今申し上げたとおりであります。

現実問題として、昔と比べて、ほとんどの子供たちが高等学校へ進学をしますね、もう100%近いぐらい。そういう状況の中において、やっぱりいかに希望する高校へ送り込むかということが、しかも目的意識を持って——中退等も非常にありますね。だから、このことがもう今における一つの命題ということに私はとらえております。

そういう中で、いわゆる中学校から高等学校まで6年間、まさに計画的といいますか、継続的な一貫した教育が可能ということの利点があるわけですが、その場合に、例えば現在、西部中、東部中が市内にあるわけですが、そこの子供たちが県立校の中学校に行くわけですので、少なからず影響を受けることにもなりますよね。だから、そういったところも加味しながら、そしてまた、これはこれとして市民のニーズも非常に高いということもありますので、両方をうまく整理しながら進めていかなければならない制度であろうというふうに私はとらえています。

ただ、文科省のほうでは、中高一貫校の整備目標として、生徒とか保護者の進路選択の1つとして、できるだけ今、通いやすいところにといいますかね、距離の近いところというのがわかりやすいですかね、そういうところに設置されるような方向性が、もう国のほうで示されているわけですね。

そういう中で、今、佐賀県内においては、御存じのとおり4校ありますね。4校の中で、この西部校区の中に今、武雄のほうにあるわけですが、この西部学区というのが非常に県内でも広いわけですよ、伊万里までこう、ありますよね、それから太良までありますから。県内こう、上から眺めてみたら、やや鹿島あたりが少し通いにくい、薄いといいますかね、こういう状況にあることが我々の地域性だと思っているんです。

だから、県に対して、当地区ならではこの必要性というのを今、要望をしているところでもありますけれども、現実、もっと近ければ行きたいなという市内の子供たちが、そういうハンディにちょっと阻まれているという現実がありますので、それはやっぱり私としてはちょっと申しわけないと。いわゆる行きたいけれども行けない状況というのは、ほかにも要因はあると思いますけれども、それが一番大きいというふうに考えております。

そういう意味で、今回、プロジェクトチームというもので検討していくことになりましたが、市長の先ほどのような考え方も生かしながら、私はある意味白紙でといいますかね、このメンバーの方々のいわゆる潜在意識とか固定概念にできるだけとられず、柔軟な発想という考え方、もうこの辺を私も期待をしたいというふうに思っております。

以上です。

○議長（橋爪 敏君）

谷口教育次長。

○教育次長（谷口秀男君）

お答えしたいと思います。

質問の中の幼保小中の連携ということの御質問がございました。幼保小中の連携、どのような体制をとっておるのかということでございます。これにつきましては、幼保小連携と小中連携を分けて御説明をさせていただきたいと思っております。

まず、幼保小のほうですけれども、平成18年2月に鹿島市幼保小連絡協議会という組織を立ち上げております。この組織は、各小学校の単位別ですけれども、幼保小の連絡会をつくりまして教育委員会、それから市内の校長会が連携した組織でございます。

この目的は、やはり幼児期の教育から小学校の教育への円滑な接続ということを図ることを目的といたしております。

必要性ですけれども、もちろん幼児ですね、児童の発達段階を踏まえて、小学校低学年を見通して就学前教育において特に身につけたい態度、そして育てたい資質を明らかにすると、ちょっとかたい表現なんですけれども、そういうことが必要性になっています。具体的に言いますと、小学校に少しずつなれて、いわゆる小1プロブレムといいますかね、の発生防止に努めるというのが目的でございます。

具体的に言いますと、保育園の授業参観とかですね、逆に小学校から授業参観と、そういうことをやったり、それから小学校の先生と幼稚園、保育園の先生との合同研修会とか、それから小学校の授業に幼稚園、保育園の先生が参加をすとか、そういうものでございます。それから、小学校5、6年生で図書委員会というのがございますが、この図書委員会の皆さんが園児の方に読み聞かせをすとか、そういう連携事業を現在進めております。

次に、小中連携ですけれども、これはもう小学校、中学校の先生方がそれぞれ情報交換をし合うというものでございます。特に、鹿島市の教育研究大会というのを実施しております。市内小・中学校のすべての先生が授業をそれぞれ参観し合っているということもやっております。それから、中学校の先生が小学校6年生の授業、例えばTTですね、数学とか外国語活動がありますけれども、そういう指導を同時に行っているということもやっております。

最後に、学級編成とか学年の当初、そして夏休み、そういうものもそれぞれ連絡会を設けて情報交換を行っているということでございます。

こういうものが小中連携という内容でございます。

以上でございます。

○議長（橋爪 敏君）

午前中はこれにて休憩します。なお、午後の会議は1時から再開します。

午後0時 休憩

午後 1 時 再開

○議長（橋爪 敏君）

午前中に引き続き会議を開き、一般質問を続けます。

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

最初の質問の折にお尋ねをしておりましたが、財政基盤強化計画が今年度までありまして、そして今、市長が考えておられる行財政改革についての体質改善、工夫などということで演告で述べられていますけれども、どのような部分を重点的に改革、改善をされていくのか最初にお伺いをいたします。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

どちらかという体質改善が意味するものは、量的なというよりも質的なものでございまして、例えば予算編成なりをするときの作業の話とか、それを市民の皆さんにお伝えするときの、いわばソフト的な部分なんですね。というのは、昨日だったですか、御質問がございましたけれども、行政、あるいは施策を決定していくときのやり方として、トップダウンでいくのか、あるいはボトムアップでいくのかという話がございましたけれども、予算編成などは大きく分けて、方針は僕はトップダウンだと思っておりますが、具体的な作業はボトムアップだと思っております。その組み合わせが大事だと思いますけれども、体質改善というのはどちらの場合でも、きちんとした意見を言える人たち、言える仕組みをつくらないといけないと思っております。どちらかの意見が通ってしまつて、批判もできなければ意見も出てこない、そういうのをつまり変えたいなことなんですね。

工夫というのが、例えばプロジェクトチームで象徴されますように、みんながその中に入って、私の言葉で言う知恵とアイデアのキャッチボールというんですかね、そういうものを交わしながら、納得した上で一定の施策をつくり上げていくと、そういう面を含めて体質改善を図りたいということで、例えば何とかの経費を削りたいとか、そういういわば量的な分を意味しているんじゃないということは御理解をいただきたいと思っております。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

確認の意味で市長のほうに質問をしたいと思っております。重複する部分もあるかもしれませんが、その辺に関しては御容赦をいただきたいと思っております。

財政基盤強化計画について小池議員のほうからも質問がございましたし、私もしましたけ

れども、一定の評価をされているということで私自身は受け取っております。しかしながら、財政につきましては公共投資等を抑えているものですから、縮小財政であったというふうにとらえておられて、地域の活力の低下、またそれが地域の衰退に今現在、少し危惧があるという答弁であったらと思います。

また、答弁の中にはありましたけれども、国保会計にしましても、法定外の昨年12月、約120,000千円の一般会計からの繰り入れをしておりますので、そういう面を考えた今現在は財政というものを全体的にとらえたときに厳しい状況であると認識をされているということによろしいでしょうか。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お話はそのとおりだと思いますが、全体として厳しいと話したんじゃなくて、想像していたよりも厳しいと、たしかそういうふうな言い方をしたと思いますけれども。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

そして、財政基盤強化計画についてということで3点お話があったと思いますが、保育所みどり園の民営化、給食センターの民営化、職員定数についてということで市長の答弁があったと思いますが、この3つについては現状ではこのままの形で計画を見ていきたいという判断をされているということによろしいですか。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

私は、現在の5カ年間の計画、あるいはその前提となったもの、それは評価すべき点、あるいは敬意を払う点があると思っておりまして、その内容になっております、今、お話があったこと。それについては現状で変更する、あるいは方針を変えるというふうなことは、とりあえずはそういう考えは持っておりません。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

もう1点ですけれども、私自身もこの議会に入りましていつも質問をしていたのがあります。それは投資的事業、いわゆる公共事業について、市の支出をどこまでやれるのかということで何度も質問をしてみました。

その答弁として、財政基盤強化計画の期間中は総額10億円をめどに、一般財源は4億円を

めどにという答弁をいつもいただいておりますけれども、先ほどの市長の答弁の中で財政基盤計画によって若干、投資についても政治判断をすることもあるかもしれないというお話がありましたけれども、この公共事業、投資的事業についての現時点での市長のお考えをお聞かせいただければと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

ちょっとその前提を1つだけお話をしておきたいと思いますが、御承知のとおり、市の予算はいろんな継続費とか繰越明許、いろいろありますけれども、そういう特別の仕組みを別にしまして1年間の歳入歳出で決めると、これはもう当然のことで御承知のことだと思います。

その場合、財源の状況とか事業執行の実態で、あるいはもう経験則を交えて、恐らく予算編成の作業を行われるんだと思いますが、特定の事業に充当する、あるいは特定の事業にどのくらいの金を頭に置いて作業をやるかということはありませんけれども、一般論としては、ある率でありますとか額でありますとかを先取りするというのは、私としては好ましいやり方ではないかと、もともと思っております。

ただ、これには条件がございまして、どうしても多額の金で長期にわたるもの、あるいは数量的に何らかの約束がされているもの、これについてはやむを得ないから、一定の金額なり数量を用意しないといけないんじゃないかと。わかりやすく言いますと、防衛費が一番わかりやすいですかね。例えば5年間でジェット機何機買うとか、このことの是非じゃないんですよ、そういうのが決まっているときは、当然、きちっとしたものを、もう何がどうあるとも歯を食いしばって計画していかないと。これはおわかりだと思います。それから、道路などがよく例にとられますけれども、日本全国何年間で何キロメートルつくと、一定のそういう約束事があるときは、それはもう先取りしないとイケない。そのかわりそういうものについては、そういう仕組みにするということを突然決めたり、だれかが発案するんじゃないかと、いろんなつかさつかさといいますかね、そういうところの約束事、あるいはオフィシャルにクリアされた手続が要るんじゃないかと、私はそう思っています。

したがって、そういう条件が満たせば、一定の金員、例えば今、4億円とあったですかね、10億円でもいいんですが、先取りするというのは前提の作業としてやらないとイケないということなんです、そういうの議論を抜きにして、例えば10億円はここに使う、4億円はこうよというのは少し胸に落ちない部分があるかなと私は思っております。

ちょっとくどいようですが、2つのやり方がありまして、もし、今おっしゃった10億円、4億円ですか、4億円を前提にして議論してみたいと思いますが、4億円を先に決めてしま

う。先取り方式といいまして、先に金額で取ってしまうということで仮にやるとしますと、かなり母数が110億円何がしですよ、その中で4億円を塩漬けにしてしまうということになりますと、一種、会計内に特別会計をつくるような形になってしまいます。どういうことがあるかといいますと、硬直的な予算編成をしてしまって、それには手をつけないと。その後、決まった後でその中でまた細分化していくということになります。これは、どうしても硬直的な予算編成をいつも強いられるということになるので、さっき言いましたように、それでいいのかなと。

それからもう1つは、その金額を超えないということを頭に置いて、先取りじゃなくてシーリング方式といいますけれども、それ以上はもう超えないよという意味の4億円と約束を仮にされていたとしますと——というのは私、前提として、その金額が約束されているかどうかちょっと頭にありませんので、議論をしますと、投資的な経費として、例えば4億円を使ってしまうということになったときに、もし財政的にもっと違うことをやらないといけないという事態が当然来ますよね。そうすると、それ以外のことができなくなって、時期を逃して、今、仮に4億円が、わかりやすく言うと、何かに使えば国から10億円金が来ますよみたいな話があったときには身動きつかないわけですよ。

だから、余り前提として、はっきりしたこういう議論は、作業として念頭に置くのはいいんですけども、だれかとだれかが約束したとか、例えば私が今から発言して議会と約束していますねという話になったら、すごく限られたといいますか、融通のきかない予算編成をするということになってくるとお思いますので、結果的にそうなること、予定調和的に議論とかの結果でそうなることはあっても、最初から来年度の事業計画、そもそも何をやるかと決まっていない段階で4億円はこれですよというのは、私は正直言って、まだまだ発言できる自信がないということですね。

逆に言いますと、むしろさっき言いました、ちょっと読みましたように、平成23年度からは多少、従来以上の投資をしてもいいみたいな予定された文書が残っておりますので、さっきの言葉を繰り返しますと、これは私といいますか、もちろんそのときはだれかわかってなかったんでしょうけど、次に予算編成を担当する市長に対して置き土産が置かれているんじゃないかと。

ですから、いろんな人と議論はもちろんしないといけませんが、このとき、もし4億円と言ってしまうと、今度は5億円にできなくなる、そういうことがございますから、現時点では余り思い込まないほうがいいのかなと。むしろ、これから本当に平成23年度、さっき話がありましたように、従来みたいな一種ブレーキを踏むような態度で臨むのか、もうそろそろ5年頑張っただけで予定どおりしたから、いろんな状況のもとでちょっとはハンドル切りかえてもいいのかなという議論があったときは、そこにこだわる必要はないんじゃないかな、そういう考えでおりますけれども。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

私がお伺いしたのも、ここ数年も一緒でしたけれども、大体、想定として鹿島市の考えとして総額10億円、一般財源として4億円程度を考えているという答弁を常にいただいていたものですから、今後の課題として、そこをがちがちにこの質問の中で固めようと、そういうのは全くありませんけれども、市長の今現在の考えの中で、これをどのようにとらえられているのかというのをお聞きしたところでございます。

もう1点、お伺いをしたいと思うんですが、確かに今の鹿島市の財政を考えたときに、これは載っている文章をそのまま読ませていただきますけれども、「平成12年、エイブルが完成をしたときの市債残高が138億円、現在が94億円になっていると。この94億円のうち地方交付税で償還経費が全額措置される臨時財政対策費、この34億円を抜けば、実質市債残高は60億円になる。」ということで載っております。

ただ、確かに財政的には整っているのかもしれませんが、もう1点はここ数年の地方交付税、補助金の負担金の縮減、また景気低迷による市民税、法人税の減収等も予想されますし、今からも厳しい財政状況に変わりはないのかなという感じを私自身は持っておりますけれども、市長として今の現状をどのようにお考えになられているのかお伺いをしたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

お答えいたします。

地方交付税に限って見てみますとね、この計画がつくられるとき、これはあくまで私いませんでしたから、いろんなデータから推測するしかないんですが、本当はもっと地方交付税は落ち込むと想像されて、ひょっとしたらこの計画に着手されたのかもしれませんが、そこから見ますと、この一、二年に限って見ても、それほど減っていないんですよ。この理由がもし御必要であれば、担当の課長から御説明をさせますけれども、そこは逆に言いますと、私が想像していたよりも地方交付税の状況はよかったです。

悪かったといいますか、あれっ、これはちょっと厳しいなと思ったのは、さっきから繰り返しているように、むしろ歳出のほうでして、少し経常経費のほうに傾いていたなど。さっきからむしろお話があっているように、投資的経費をやや硬直的に編成されたのかなという部分を見ると、想像よりも厳し目だったかなと思っております。よろしゅうございますか。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1番（松田義太君）

地方交付税については、多分平成12年とかからずっと比べていけば、落ち込みは相当あったと思います。この財政基盤強化計画をつくられてからは、少し別に緩やかになっているという表現がいいのかわかりませんが、緩やかになっているような気がいたしますが、市長の演告の中で、こういうやっぱり厳しい状況だからこそ国や県の施策と連携し、必要な公共投資の財源を確保してまちづくりを推進するというふうに述べておられますけれども、これについて就任されて1カ月ですから、具体的な施策というのは今現在はないのかもしれませんが、見通しとしてこういうことをしたいとか、こういうことを考えているということがあられば御説明いただければと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

事例を2つお話をしたいと思います。

1つは、最近、落成式が行われました湯ノ峰の公民館ですよね。これは、極端に言うと、事前にはあんまり考えられていなかったんですよ。直前に、使い勝手のいい情報に我がほうがタッチしたと。これはいろんな方の御努力もあったんだと思いますが、極めてすばらしい施設ができました。これは、ある意味で投資的経費だと見ていいと思うんですよ。

こういう情報とか、そういう情報を流してくれるパイプ、そういうものをやっぱりきちんとしておかんといかんなど。日ごろそういうものがあれば、こういう情報も飛び込んでくるということだと思います。

それからもう1つは、金がないときは知恵を出せと一般的に言えるんですが、そう簡単に知恵が出てくるものじゃないんですけれども、例えば社会福祉協議会ですかね、さくら号という車があると思いますけれども、あれは何で金が来ているかという競馬の金なんですよ。

それから私の経験で言うと、かつて、もう何年前になりますか、琴路神社に馬かけという行事がありますので、競馬の金でいろいろ御助成をしたという記憶があります。これは、全く国の財政負担とは関係ありませんから。

こういうのも知恵を出したら、それなりの報いがあるということなので、何でも自分の懐でひねくり出すということではなくて、そういう情報とかアイデアとかというものをいろいろ交換しているときにこういう種は出てきますので、そういうことがあるようにやっていかないといけないと、そういう印象を、この期間持っていますので。

ただ、非常に蛇足ですが、お話をしておきますと、競馬の金を使っている車両の名前がさくら号というんですよ。競馬の関係者はさくら肉は絶対食べないで嫌いますので、そういうところもできたら配慮したほうが、こういう作戦がうまくいくかなと思っております。

以上です。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

いろいろな視点で答弁をされますので、こちらもどう返していいのかよくわかりませんが、先ほど答弁をいただきまして、やはりそういう国や県の政策というのを、いかに市がキャッチをして、それをいかにして自分たちの市にとって活用できるのかというのを常にやっぱり考えておく必要が私もあると思います。

そういう情報をいかにとれるかという体制を今後、樋口市長は築いていかれると思いますけれども、今回、質問をするに当たってと、またいろいろ勉強する中で、非常に財政というのが厳しくなっているんだなというのを私はつくづく感じました。

市長の出身の農林水産省のここ10年間の予算規模というのを取り寄せてみましたけれども、間違っていれば指摘をしていただきたいと思います。総予算で平成12年度、これが3兆4,000億円ぐらいあったのが、平成22年度2兆4,000億円。公共事業費になりましては、平成12年度1兆7,600億円、これが平成22年度650億円ぐらいになっています。

県の公共投資ですね、これについても調べてみましたが、平成12年度1,743億円、平成22年度936億円という形でマイナス46%という形になっていまして、非常にどの分野も厳しい財政状況の中で運営をされていることを強く感じました。

この中で樋口市長は新しく市政を担っていかれると思いますが、これは繰り返しては失礼になるかもしれませんが、行財政改革、財政基盤強化計画というのを今後も維持をされながら財政運営に当たっていかれるのか、財政状況に応じては臨機応変に恐らく対応されると思いますが、基本としてはどのような観点で運営をされていくのかをお伺いをしたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

先ほど農林水産省の予算の話がされましたけれども、一番最後のころは私もまだ現役でありまして、そのころの議論を踏まえて言いますと、一番の落ち込みはもう端的に言えば公共事業の削減なんですよね。これは農水省だけではございませんで、一番影響を受けたのは恐らく国交省じゃないかと思います。その削減が一番大きかったんですよ。それからもう1つは、林野関係にもそういう部分の、何と申しますか、国土管理と申しますかね、そういう部分で影響が来ているんじゃないかと思います。

ただ、そのときに従来と違った考え方をとろうじゃないかと、2つだけお話をしますと、1つは当時の農政の中で自給率の向上ということが大きな目標とされておりました。したが

って、それ関係の予算を少し頑張ってみようかという組み替えはしました。したがって、今どきの言葉で言いますと、仕分けに近い作業を行った記憶がございます。

それからもう1つは、もう長年、昭和45年ぐらいからですか、やってきたいわゆる米対策、そういう転作と言ってもいいんですが、対策に少し、従来方式じゃなくて、もうちょっと農家の皆さん、参加される方の自主性といいますかね、責任分担と言ってもいいと思いますが、そういうのを織り込めないかという議論があったような記憶があります。

そのときに、従来、ややもすれば土地利用という感覚があったので、できるだけいろんなものをおつくりになるときには、そういう助成といいますかね、それが幅広く行くようになっておりましたが、次第に対象作物を絞りまして、麦、大豆、飼料作物というふうに絞っていきましたですね。その絞る過程で、いわゆる米対策費が減っていったんじゃないかと。それが大きなことになっているんじゃないかと思います。

そういう背景を踏まえて財政状況が厳しくなっておりますけれども、逆に言えば、農業関係費に限って見ますと、結構、土地利用とか転作作物、米以外の作物で知恵を出す、あるいは工夫をする。自給率の向上という特定の作物に限って力を注げば、逆に使える予算はふえると。そのかわり、とにかく何でんかんでんということじゃなくて、いろんな制約はありますよということだったんですよ。

そういう中で、昨年、これは御承知でしょうけど、戸別補償という仕組みになりまして、どちらかというとその部分に限って言えば、やや従来型とはまた違った、もう一回、その前の形を頭に置いた考慮がされているということで、これはこれで議論があるかと思っておりますけれども。

そういう国の財政の中で一体、地元、こういう市町村はどういうふうに動くんだろうかというときには、一言で言いますと、早く使い勝手のいい予算を探して、よく関係者と相談して、とにかく金を使っ張ってくると、そういう情報とか団体とか仲間とか、そういうものをきちっと日ごろからつくり上げていくということではないかと思っております。

それと、先ほどの削減計画といいますか、5カ年計画に限って言えば、私はあそこに書いてあるとおり、文字どおり受けとめまして平成22年度で一応めどを立てると。そのかわり、その中で予定されている、積み残しと言っては失礼なんですけど、幾つかございますね。それは、その計画がそういうことで動いてきたから、まずはそのとおり対応していく。これは先ほど御答弁をしましたとおりです。

改めて、平成23年度の予算編成を臨むに当たっては、もう一回、白紙とは言いませんけれども、これまでの議論にとらわれないで、少し予算編成に対応してみたい、そういうふうに思っております。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1番（松田義太君）

農林水産関係の事業の説明をしていただきましたので、私も資料をいただいたときに公共事業が非常に落ちているんだけど、非公共事業についてはほとんど変わっていないような数字であったものですから、今の市長の話を聞いてよくわかりました。そこでも市においても活用できる分があるということであれば、それを活用されていくということになるだろうと、今の答弁で思いましたので。

それと、最後に市長が先ほどの答弁の中で、財政基盤計画が平成22年度で終了をするので、もう一回白紙からしていきたいというお話であったと思いますが、先日、徳村議員のほうからもありましたけれども、身体障害者福祉協会の助成金とか、また財政基盤強化計画の中でシルバー人材センターの運営補助金、社会福祉協議会の運営補助金、消防団の運営交付金とか、それぞれの団体の交付金というのを厳しい財政状況を勘案してカットをされてこれていると思います。

白紙からというお話でありますので、できればこういうもの全体、すべてをもう一度見直す作業というのをしていただきながら、抑えるところは抑えなければならないと思いますけれども、全体の今の状況の中から財政基盤強化計画、また今度、平成23年度から新たにそういう計画をつくられるとするならば、もう一度根本、全く白紙の段階から見直していただければと思うんですけども、いかがでしょうか。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

私の言った言葉を——ちょっと誤解を与えたかもしれませんが、白紙にするとは、たしか言わなかったので、白紙ではないけれども、そこにこだわらないで、とらわれないでということでございますから、全くさらということになりますと、これは5年前に計画をつくるときにやった作業がどれだけ大変だったかと御記憶だと思いますけれども、現在の私どもの役所の体制、あるいは組織の中にそれをもう一回、今、白紙から見直してやるというような実は組織的にも時間的にも余裕があるという認識に私、立っていませんから、強いて言えば、あの計画は計画に従ってやらないといけないことをやるけれども、23年度の予算編成についてはとらわれないで必要な部分については、その部分にある程度の手直しが、あるいは必要な増額するものがあるとするれば、やってもいいかなあという余裕が出てきているかなというふうに思っていると理解をしていただければ幸いです。決して、あれは済んだから、もう大盤振る舞いしてよかばいと、そういうふうには決して思っていないということは御理解いただきたいと思いますが。

○議長（橋爪 敏君）

1番議員松田義太君。

○1番（松田義太君）

私もきちんと把握をしていなかった部分と、ちょっとかみ合っていない部分があったと思いますが、私も基本的にはこの財政基盤強化計画というのは堅持をしながらやっていかなければならないと思います。

先ほど申し上げたとおり、財政的にはやっぱり厳しい財政状況が続くと思いますので、ただ、今、市長がおっしゃったように、私が白紙の部分というのは、先ほど市長がおっしゃったような意味で私は質問をしたつもりだったんですが、そのように考えております、手直しするところは手直しをしなければならないと思いますので。

ただ、やっぱり皆さん、厳しい中で今まで来ていますので、鹿島であれ言うぎ、どがんなっこんならんやろうかという気持ちを皆さん、各団体の方が持たれていると思いますので、そういうところを勘案をしながら御判断をしていただければなと思います。

次に、ちょっと時間が過ぎておりますので、財政のほうから教育のほうに移りたいと思いますけれども、中高一貫教育についてであります。

これについて1点だけ、私は質問をさせていただきたいと思いますが、致遠館の中高一貫の高校ができたとき、また今回、武雄のほうでもできておりますけれども、そのときに既存のそれぞれ近隣に中学校とかが私はあると思います。こういうところにどのような影響があったのかということをお伺いしたいと思うんですが。

○議長（橋爪 敏君）

小野原教育長。

○教育長（小野原利幸君）

公立中学校への影響ということですかね、当然のことながら、小学校を卒業する時点でどうするかという進路選択というのが出てきますよね。私どものときは、小学校から地元の中学校にというのがもう当然のように、判断の必要もなかったわけですけども、そして、現在の中高一貫校は県立の場合、抽せん制ではなくなっていますね。適性検査とかいろんな調査書と総合的に判断されますので、幾らかやっぱり小学校卒業時点における受験競争的な要素というものが幾らか加わってくるかもわかりません。端的、西部中、東部中学校のこの生徒数ということにも影響してくることも起こり得ることですので、やっぱりメリットもあり、懸念も正直あるというふうに思います。

そういう意味で、先例の致遠館とか武雄あたりの実例ですけども、ちょっと武雄あたりで申しますと、やはり一番大きな武雄中学校、1クラス減ぐらいの影響が出ていますね。そういうことも当然、想定されることではないかというふうに思っております。

ただ、もし近い位置の中高一貫校が実現をすれば、西部中、東部中を含めて、この地区に中学校そのものがふえるわけですよ。だから、選択の幅は広がると。

設置の市町村としては、やっぱり複雑な思いもありますけれども、どこで学ぶにしても同

じ鹿島の子供たちであるということには変わりありませんので、議員がきょう、今回の質問をされていますように、まさに地域で育てる人づくりといたしますかね、そういうふうな一環として教育環境が整備されることも方法の1つかなという思いはあります。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

そして、もう1点ですけれども、中高一貫教育については今後、プロジェクトチームを初め、その中で議論をされると思いますので、その議論の結果を聞きながら私も議員として御質問をしていきたいと思っております。

もう1点が、最初の質問のときに幼稚園・保育園、小学校、中学校との連携がどうなっているのかということで御質問をいたしましたけれども、教育次長の谷口次長と橋村福祉事務所所長いらっしゃいますけれども、今回、異動があつて赴任をされてから、自分の管轄の教育次長として小学校、中学校、また福祉事務所の管轄として市内の保育園とかその他施設というのを自分の足を運んで今の状況がどうなっているのか、授業というのがどういう形で行われているのか、そういうのを見に行かれたことはありますでしょうか。

○議長（橋爪 敏君）

橋村福祉事務所所長。

○福祉事務所所長（橋村 勉君）

お答えします。

福祉事務所所長を4月1日から拝命を受けましたけれども、所管の保育園について、うちの場合はみどり園なんですけれども、みどり園のほうには入園式とかに行きながら、あとちょっと定かな記憶じゃないんですけど、一、二回、見学といたしますか、見に行っております。

ただ、ほかの法人の保育園については、まだ現場には足を運ぶ機会がありませんでしたので、今のところは行っていません。あと、ほかに子育て支援センターとか直営でありますので、そこら辺にはちょこちょこ行きながら子供たちの様子等をお伺いはしております。

以上です。

○議長（橋爪 敏君）

谷口教育次長。

○教育次長（谷口秀男君）

お答えいたします。

4月から教育次長をいたしてはいますが、学校訪問とかずっと日程組まれていますが、近々あったのはちょっと別の用で重なったわけですが、そういう学校訪問も今から頻繁に行くようにいたしております。

それからいろんな学校の施設でございますが、修繕等の要望もございます。そういうのも

逐次、学校訪問をしておりますし、いろんなことを校長先生とか教頭先生、もちろん学校の先生もですけども、情報交換をいたしておるところでございます。

以上です。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

教育長の答弁の中で、やっぱり地域で人を育てる環境というお話をさせていただきましたけれども、そしてまた樋口市長が一番大切にされている市民目線、現場第一主義でというお話であったと思いますが、できれば、これは自分の私個人の意見ですけども、できるだけ現場というのを見ていただいて、確かに市管轄の保育園というのはみどり園だけですけども、ほかの園も見ていただいて、今、保育園の現状というのがどういう状況であるのか、また教育の分野に関すれば、やっぱり小学校、中学校を見ていただく。施設はもとより、やはり授業の風景とか見ていただいて、そういう中で自分が感じて行政に生かしていくというのが、私は今から一番大事な部分ではないかなと思います。

ハードな部分で投資をできる分は限られておりますので、やはりソフトの面というのは、そういうところを自分の足を運んで、それを政策に反映させていかれるのが一番だと思いますし、そういうところに行けば、お母さん、お父さん方のいろいろな意見も聞かれるところもあるかもしれませんので、そういうところを私は大切にしていっていただきたいと思いますが、樋口市長、どのようにお考えになられるでしょうか。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

今のお話は、十分よく理解できます。担当のところだけでなく、私自身もできるだけ現場に行きたいと思っておりますし、また現場に行くのはちっともやぶさかじゃないタイプの間人だと思っていますので、せいぜい頑張りたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

樋口市長とお会いを最初にしましたのは、今から7年前の知事選のときであったと思います。そのとき、市長の演説を候補者として聞く機会が何度かありましたときに、情報の共有化というのを必ず力点を置いて言われていました。私もその時点においては、その意味がよくわからなかったのですが、こういう議員という立場になったときに、初めてその意味がわかったような気がします。ただ、それが同じであるのかわかりませんが、その原点というのは、やはりその現場に行って、皆さんがどういう気持ちでおられるのか、同時にこちら側の

意見を言って皆さんがどうとらえられるのか、その両方の意見を共有しながら運営をしていかないと、再三になりますけれども、やっぱり厳しい財政状況でありますので、なかなか市民の方々の理解と御協力というのは難しいのではないかなど。そういう意味で今からの行政というのは、本当の意味で市民との情報の共有化をして行政をしていかなければならないと私は思います。

その点について、今、市長の答弁もありましたように、できるだけ自分もというお話でありますので、行かれるときは、もしよければ議員のほうにも声をかけていただいたりとか、一体となっていい方向に持っていくように私はしなければならぬと思いますので、その辺についての御見解があればお伺いをしたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

今のお話とは、ややちょっと私の思いは完全に重ならないところがあると思います。御趣旨はわかります。私は、申しわけないですけど、議員とか区長さんとか、あるいは国会議員の方とかと、あんまり何かアクションをとるときに肩書きできちっと整理してこうしようあししようと思わないほうがいいなともとも思っていますので、例えば、ある集落に行くときには区長さんじゃないといけないとか、ここには議員がおられたから声をかけようとか、そういう意味のこだわりはないようにしたいと思います。いろんなテーマで、むしろこの人の意見を聞いたほうがいいなと思ったときは、聞きに行くことがやぶさかじゃないですし、お見えになる方はできるだけお会いしたいと思っています。もちろん議員の皆さんの意見を聞くことは全く大切なことだと思っていますから、そういう機会があれば、もうどなたとでも一緒に行きたいなと。むしろ、どなたとでも意見を聞きたいなと思うタイプでございますので、今おっしゃったことをそのとおりとるか、いやそれはだめだとかは言いませんので、その考えだけは理解をしておいていただきたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

○1 番（松田義太君）

私もこぞって一緒に行くと、そういう感じでは考えておりませんが、それぞれの課題があったときは、やはり一緒になって取り組まなければならないときがあると思いますので、そういうときには同じ情報を共有しながら私はやっていかなければならないと思います。そういう意味で申し上げたつもりでございます。

もう1点が、ちょっと時間が来ましたので、完璧に、また食い違いがあるかもしれませんが、御容赦いただきたいと思いますが、最後に九州新幹線長崎ルート、JR長崎本線問題というのを、もうこの短い時間ですので、余り問えませんので、1点。

鹿島市はこのプロジェクトで非常に厳しい局面もありましたし、同時に厳しい立場にあったと私は思います。その中で、前市長についても、議会についても、市民の皆さんについても、非常に厳しい状況に追い込まれて、そのときそのときの判断をせざるを得なかったというふうに思います。

私の一個人としての意見を申し上げますと、国策に何か振り回されたような感じがするんですね。三者基本合意があつて、今度は政権が交代して大臣の方々が、またそれに関する方々がいろいろな発言をされると。そしてまた、それについて鹿島市というのは、またそれぞれの分野から注目をされて対応をしていかなければならないというふうになっている気がしてなりません。市長の演告にもありますけれども、それはそれとしてやらなければならないことはやっていかなければならないという思いは一緒であると思います。

ただ、長きにわたって国の要職を務めてこられた樋口市長におかれて、こういうプロジェクトについての見解というのは、いけないのかもしれませんが、少しお考えを述べていただければなと思います。

○議長（橋爪 敏君）

樋口市長。

○市長（樋口久俊君）

一言で申し上げますと、これは大変な大きなプロジェクトであると同時に時間を要するプロジェクトだと思います。

それで、まだまだ決着が正直言って、私は本当についているのかなという疑問が少し残っているんですよ、率直に言いますと。だから、この時点でそこを余りに克明に分析して行く末を決めるといのはリスクーだと思っています、現在の事業そのものについて。ただ、これまでの扱いについては、前の市長の桑原さんがおっしゃっているとおり、評価は後世にゆだねるとおっしゃっていますから、まさに今、私が判断することではなくて、いずれ決着したときに、あるいは落ちついたときに皆さんがどう判断されるかではないかと思います。私は今、与えられた場面で精一杯働くと、それが私の使命だと思っていますので、そういうことでお答えをしておきたいと思います。

○議長（橋爪 敏君）

1 番議員松田義太君。

¥ 1 番（松田義太君）

答弁がありましたとおり、また私も思いますけれども、非常に難しいかじ取りを今からまた迫られていくんだと思います。

地域で、地域の中で、地域で決められる事業であれば、それであればいいんでしょうけど、やはり関係する国、県含めての、また関係市町村とも含めての課題でありますので、この問題を含めて今後の市政というのは厳しいかじ取りを迫られると思います。

そういう意味において、樋口市長におかれましては長年の行政経験もあられますので、そういうものをお酌みして頑張ってもらいたいと思いますけれども、同時に市民と一緒にあって、市民の意見を十分に聞かれながら、現場第一主義で頑張っていたきたいと、そのように思います。

これで1番議員の質問を終わります。

**○議長（橋爪 敏君）**

以上で1番議員の質問を終わります。

よって、本日の日程はこれにて終了いたします。

明19日から20日までは休会とし、次の会議は21日午前10時から開き、議案審議を行います。

本日はこれにて散会いたします。お疲れさまでした。

**午後 1 時50分 散会**